



晚 年

太 宰 治

新潮文庫

ばん
晩

ねん
年



定価 280 円

新潮文庫 草6 A

昭和二十二年十二月十日 発行
昭和四十三年四月十日 三十四刷改版
昭和五十四年七月十日 五十七刷

著 者 太 宰 治 おさむ

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京 都 新宿 区 矢 来 町 七 一
電話 業務 部 (〇三)(二六六)五一一
編集 部 (〇三)(二六六)五四二一
振 替 東京 四 一 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

晚 年

太 宰 治 著

新 潮 社 版

目次

葉		思	魚	列	地	猿	雀	道	猴
		い	服		球	ケ		化	面
		出	記	車	図	島	こ	華	冠者
.....	二四	六五	七五	八〇	六〇	一〇〇	一〇六	一六三	

逆 行……………一八三

彼は昔の彼ならず……………一九

ロマネスク……………二四二

玩 具……………二六七

陰 火……………二七五

めくら草紙……………二九五

解説 奥野健男

晚

年

葉

撰まづばれてあることの
恍惚こゝろと不安と
二つわれにあり

ヴェルレエヌ

葉

死のうと思っていた。ことしの正月、よそから着物を一反もらった。お年玉としてである。着物の布地は麻であった。鼠色のこまかい縞しま目が織りこめられていた。これは夏に着る着物である。夏まで生きていようと思った。

ノラもまた考えた。廊下へ出てうしろの扉とびらをばたんとしめたときに考えた。帰ろうかしら。

私がわるいことをしないで帰ったら、妻は笑顔をもって迎えた。

その日その日を引きずられて暮くしているだけであった。下宿屋で、たった独ひとりして酒を飲み、独りで酔い、そうしてこそそこそ蒲ふし団を延べて寝る夜はことにつらかった。夢をさえ見なかった。

疲れ切っていた。何をするにも物憂かった。「汲み取り便所は如何に改善すべきか？」という書物を買って来て本気に研究したこともあった。彼はその当時、従来の人糞の処置には可成まいっていた。

新宿の歩道の上で、こぶしほどの石塊がのろろ這って歩いているのを見たのだ。石が這って歩いているな。ただそう思うていた。しかし、その石塊は彼のまえを歩いている薄汚い子供が、糸で結んで引摺っているのだということが直ぐに判った。

子供に欺かれたのが淋しいのではない、そんな天変地異をも平気で受け入れ得た彼自身の自棄が淋しかったのだ。

晩

年

そんなら自分は、一生涯こんな憂鬱と戦い、そうして死んで行くことになるんだな、と思えばおのが身がいじらしくもあった。青い稲田が一時にぼっと霞んだ。泣いたのだ。彼は狼狽えだした。こんな安価な殉情的な事柄に涕を流したのが少し恥かしかったのだ。

電車から降りるとき兄は笑うた。

「莫迦にしょげてるな。おい、元氣を出せよ」

そうして竜の小さな肩を扇子でポンと叩いた。夕闇のなかでその扇子が恐ろしいほど白っぽかった。竜は頬のあからむほど嬉しくなった。兄に肩をたたいて貰ったのが有難かったのだ。いつもせめて、これぐらいいにでも打ち解けて呉れるといいが、と果敢なくも願うのだった。訪ねる人は不在であった。

兄はこう言った。「小説を、くだらないとは思わぬ。おれには、ただ少しまだるっこいだけである。たった一行の真実を言いたいばかりに百頁の零團氣をこしらえている」私は言い憎そうに、考え考えしながら答えた。「ほんとうに、言葉は短いほどよい。それだけで、信じさせることができるならば」

また兄は、自殺をいい気なものとして嫌った。けれども私は、自殺を処世術みたいな打算的なものとして考えていた矢先であったから、兄のこの言葉を意外に感じた。

白状し給え。え？ 誰の真似なの？

水到りて渠成る。

彼は十九歳の冬、「哀蚊」という短篇を書いた。それは、よい作品であった。同時に、それは彼の生涯の渾沌を解くだいじな鍵となった。形式には、「雛」の影響が認められた。けれども心は、彼のものであった。原文のまま。

おかしい幽霊を見たことがございます。あれは、私が小学校にあがって間もなくのことでございますから、どうで幻燈のようにとろんと霞んでいるに違いございませぬ。いいえ、でも、その青蚊帳に写した幻燈のような、ぼやけた思い出が奇妙にも私には年一年と愈々はっきりして参るような気がするのです。

なんでも姉様がお婿をとって、あ、ちょうどその晩のことでございます。御祝言の晩のこと下

ございました。芸者衆がたくさん私の家に来て居りまして、ひとりのお綺麗な半玉さんに紋附の紋びを縫って貰ったりしましたのを覚えて居りますし、父様が離座敷の真暗な廊下で背のお高い芸者衆とお相撲をお取りになっていらっしやったのもあの晩のこととございました。父様はその翌年お歿になりましたが、今では私の家の客間の壁の大きな御写真のなかに、おはいりになって居られるのでございますが、私はこの御写真を見るたびごとに、あの晩のお相撲のことを必ず思い出しますのでございます。私の父様は、弱い人をいじめるようなことは決してなさらないお方でございましたから、あのお相撲も、きつと芸者衆が何かひどくいけないことをなしたので父様はそれをお懲しめになっていらっしやったのでございましょう。

それやこれやと思ひ合せて見ますと、確かにあれは御祝言の晩に違いございませぬ。ほんとうに申し訳がございませぬけれど、なにもかも、まるで、青蚊帳の幻燈のような、そのような有様でございますから、どうで御満足の行かれますようお話がでかねるのでございます。でもなく夢物語、いいえ、でも、あの晩に哀蚊の話聞かせて下さったときの婆様の御めめと、それから、幽霊、とだけは、あれだけは、どなたがなんと仰言ったとて決して決して夢ではございませぬ。夢だなぞとおろかなこと、もうこれ、こんなにまさまざ眼先に浮んで参ったではございせんか。あの婆様の御めめと、それから。

さようでございます。私の婆様ほどお美しい婆様もそんなにあるものではございませぬ。昨年の夏お歿になりましたけれど、その御死顔と言ったら、すごいほど美しいとはあれでございましょう。白蠟の御両頬には、あの夏、木立の影も映らむばかりでございました。そんなにお美しくいらっしやるのに、縁遠くて、一生鉄漿をお附けせずにお暮しなさったのでございます。

「わしという万年白歯を餌にして、この百万の身代ができたのじゃぞえ」

富本でこなれた洩い声で御生前よくこう言い言いして居られましたから、いずれこれには面白い因縁でもあるのでございましょう。どんな因縁なのだろうなどと野暮なお探りはお止しなさいませ。婆様がお泣きなさるでございましょう。と申しますのは、私の婆様は、それはそれは粹なお方で、ついに一度も縮緬ちりめんの縫紋の御羽織をお離しになったことがございませんでした。お師匠をお部屋へお呼びなされて富本の御稽古をお始めになられたのも、よほど昔からのことでございましてでしょう。私なぞも物心地が附いてからは、日がな一日、婆様の老松おいまつやら浅間あさまやらの咽むせび泣くような哀調のなかにうっとりしているときがままございました程で、世間様から隠居芸者とはやされ、婆様御自身もそれをお耳にしては美しくお笑いになって居られたようでございました。いかなることか、私は幼いときからこの婆様が大好きで、乳母から離れるとすぐ婆様の御懷ふところに飛び込んでしまったのでございます。もっとも私の母様は御病身でございました故、子供には余り構うて呉れなかったのでございます。父様も母様も婆様のほんとうの御子ではございませぬから、婆様はあまり母様のほうへお遊びに参りませず四六時中、離座敷のお部屋にばかりいらっしやいますので、私も婆様のお傍そばにくっついて三日も四日も母様のお顔を見ないことは珍らしゅうございませんでした。それゆえ婆様も、私の姉様なぞよりずっと私のほうを可愛がって下さいまして、毎晩のように草双紙くさそうしを読んで聞かせて下さったものでございます。なかに、あれあの八百屋お七の物語を聞いたときの感激は私は今でもしみじみ味わうことができるのでございませ。そしてまた、婆様がおたわむれに私を「吉三」「吉三」とお呼びになって下さった折のその嬉しさ。らむぶの黄色い燈火ともしびの下でしょんぼり草双紙をお読みになっていらいらっしゃる婆様のお美し

い御姿、左様、私はことごとくよく覚えていたのでございます。

とりわけあの晩の哀蚊の御寝物語は、不思議と私には忘れることができないのでございます。そう言えばあれは確かに秋でございました。

「秋まで生き残されている蚊を哀蚊と言うのじゃ。蚊燻しは焚かぬもの。不憫の故にな」

ああ、一言一句そのまんま私は記憶して居ります。婆様は寝ながら滅入るような口調でそう語られ、そうそう、婆様は私を抱いてお寝になられるときには、きまって私の両足を婆様のお脚のあいだに挟んで、温めて下さったものでございます。或る寒い晩なぞ、婆様は私の寝巻をみんなお剃ぎとりになっておしまいになり、婆様御自身も輝くほど綺麗な御素肌をおむきだし下さって、私を抱いてお寝になりお温めなされてくれたこともございました。それほど婆様は私を大切にしていってくださったのでございます。

「なんの。哀蚊はわしじゃがな。はかない……」

仰言りながら私の顔をつくづくと見まもりましたけれど、あんなにお美しい御めめもないものでございます。母屋の御祝言の騒ぎも、もうひっそり静かになっていたようでございましたし、なんでも真夜中ちかくでございましたでしょう。秋風がさらさらと雨戸を撫でて、軒の風鈴がその度毎に弱弱しく鳴って居りましたのも幽かに思ひだすことができるのでございます。ええ、幽霊を見たのはその夜のことでございます。ふっと眼をさまして、おしっこ、と私は申しましたのでございます。婆様の御返事がございませんでしたので、寝ほけながらあたりを見廻しましたけれど、婆様はいらっしゃらなかったのでございます。心細く感じながらも、ひとりでそっと床から脱け出しまして、てらてら黒光りのする櫛普請の長い廊下をこわごわお厠のほうへ、足の

裏だけは、いやに冷や冷やして居りましたけれど、なにさま眠くって、まるで深い霧のなかをゆらりゆらり泳いでいるような気持ち、そのときです。幽霊を見たのでございます。長い長い廊下の片隅に、白くしょんぼり蹲うすくまって、かなり遠くから見たのでございますから、ふいるむのようかたずくに小さく、けれども確かに、確かに、姉様と今晚の御娯様とお寝になつて居られるお部屋を覗のぞいているのでございます。幽霊、いいえ、夢ではございませぬ。

芸術の美は所詮しよせん、市民への奉仕の美である。

花きちがいの大工がいる。邪魔だ。

それから、まち子は眼を伏せてこんなことを囁ささやいた。

「あの花の名を知っている？ 指をふればばちんとわれて、きたない汁をはじきだし、みるみる指を腐らせる、あの花の名が判はつたらねえ」

僕はせせら笑い、ズボンのポケットへ両手をつっ込んでから答えた。

「こんな樹の名を知っている？ その葉は散るまで青いのだ。葉の裏だけがじりじり枯れて虫に食われているのだが、それをこっそりかくして置いて、散るまで青いふりをする。あの樹の名さえ判はつたらねえ」

「死ぬ？ 死ぬのか君は？」

ほんとうに死ぬかも知れないと小早川は思った。去年の秋だったかしら、なんでも青井の家に小作争議が起ったりしていろいろのことが青井の一人に振りかかったらしいけれど、そのときも彼は薬品の自殺を企て三日も昏睡し続けたことさえあったのだ。またついせんだつても、僕がこんなに放蕩をやめないとつまりは僕の身体がまだ放蕩に堪え得るからであらう。去勢されたような男にでもなれば僕は始めて一切の感覚的快楽をさせて、鬭争への財政的扶助に専心できるのだ、と考えて、三日ばかり続けてP市の病院に通い、その伝染病舎の傍の泥溝の水を掬って飲んだものだそう。けれどもちょっと下痢をしただけで失敗さ、とそのことを後で青井が頼あからめて話すのを聞き、小早川は、そのインテリ臭い遊戯をこのうえなく不愉快に感じたが、しかし、それほどまでに思いつめた青井の心が、少からず彼の胸を打ったのも事実であった。

「死ぬば一番いいのだ。いや、僕だけじゃない。少くとも社会の進歩にマイナスの働きをなしている奴等は全部、死ぬばいいのだ。それとも君、マイナスの者でもなんでも人はすべて死んではならぬという科学的な何か理由があるのかね」

「ば、ばかな」

小早川には青井の言うことが急にばからしくなつて来た。

「笑ってはいけない。だって君、そうじゃないか。祖先を祭るために生きていなければならぬとか、人類の文化を完成させなければならぬとか、そんなたいへんな倫理的な義務としてしか僕たちは今まで教えられていないのだ。なんの科学的な説明も与えられていないのだ。そんな僕たちマイナスの人間は皆、死んだほうがいいのだ。死ぬとゼロだよ」

「馬鹿！ 何を言っているやがる。どだい、君、虫が好すぎるぞ。それは成る程、君も僕もせんぜん

生産にあずかっていない人間だ。それだからとて、決してマイナスの生活はしてはいけないと思うのだ。君はいいたい、無産階級の解放を望んでいるのか。無産階級の大勝利を信じているのか。程度の差はあるけれども、僕たちはブルジョアジイに寄生している。それは確かだ。だがそれはブルジョアジイを支持しているのとはぜんぜん意味が違うのだ。一のプロレタリアアトへの貢献と、九のブルジョアジイへの貢献と君は言ったが、何を指してブルジョアジイへの貢献と言うのだらう。わざわざ資本家の懐を肥してやる点では、僕たちだってプロレタリアアトだって同じことなんだ。資本主義的経済社会に住んでいることが裏切りなら、闘士にはどんな仙人が成るのだ。そんな言葉こそウルトラというものだ。小児病キンデルクランクハイというものだ。一のプロレタリアアトへの貢献、それで沢山。その一が尊いのだ。その一だけの為に僕たちは頑張がんばって生きていなければならぬのだ。そうしてそれが立派にプラスの生活だ。死ぬなんて馬鹿だ。死ぬなんて馬鹿だ」

生れてはじめて算術の教科書を手にした。小型の、まっくろい表紙。ああ、なかの数字の羅列ちれつがどんなに美しく眼にしみたことか。少年は、しばらくそれをいじくっていたが、やがて、巻末のページにすべての解答が記しるされているのを発見した。少年は眉まゆをひそめて呟つぶやいたのである。「無理だなあ」

外はみぞれ、何を笑うやレニン像。

叔母おばの言う。